

「山 か づ ら」小 考

三 沢 諄 治 郎

序	暁の雲
かづら	地唄「雪」
玉かづら	地唄「山かづら」
山かづら	尻取り
定家かづら	

序

江戸末期に流行した「尻取り」の句に、
○下谷上野の山かつら、桂文治は咄し家で……

というのがあり、「山かつら」と下谷・上野との間にはどんな因縁があるのか、恐らく此の句は当時万人御承知の言い草であったのだろうと思われるが、それが一体何に拠っているのか是非知りたいと思っても、見聞の狭い悲しさは一向に手繰るべき筋がなく、何となく心の落ち着きを失っていた折、ふと耳にした地唄の「雪」の末句が

○……捨てた浮世の山かづら。

となっているのに気付き、今度は尻取りと地唄との「山かづら」に互にどんな縁があるのか、どんな違いがあるのか、多大の興味をよび起こされ、それに件の「雪」の歌詞の解釈の上にも「山かづら」を含めて妙に異なった説のあることを知ったのである。

後に挙げるけれども、地唄の中には特に「山かづら」と題した別の一章があって、これの末句も亦「山かづら」という語で結んでおり、この句の使用ぶりを尻取りや「雪」のそれと比較して見たならば、「山かづら」の意味するものを或は確かめる頼りになるのではあるまいか。

この他「山かづら」という語を使った例をあれこれと集めて見ると、どう

やら中世・近世では此の語に幾通りかの異なった意義を持たせて使っていたらしい。従って作品のその場その場によって、それぞれの解を考えて行かねばならぬわけである。

そうした意義変遷の経路をたどって見ようとするのが此の小考の目的である。

か づ ら

最初に自戒しておかねばならぬのは「かつら」と「かづら」との差別である。いうまでもなく、樹木の桂は「かつら」と澄み、つる草の方は「かづら」と濁るのが定法であって両者を混同することはいけないことだが、いろいろな場合に（殊に江戸後期あたりの一般社会では）つる草に当る方の語でも発音の習慣上からか「かつら」と澄む場合があったようだ。例えば葛城山を「かつらぎやま」¹⁾といったり、芝居で使う仮髪を「かつら」という如きである。仮髪は蔓草を髪飾りとしたことから出発して、総じて髪飾りに属する添髪や仮髪となったものと考えられるから、理窟からいえば「かづら」であるべきだが今は清音に「かつら」とよむ。やはり一種の転訛というべきだろう²⁾。

また、序のところに引いた「下谷上野の山かつら、桂文治は……」の場合なども当時「山かつら」と澄んで呼んでいたためであろうと察せられ、その点、微妙なところがあり、事毎にひどく煩瑣にわたるので、この小考では、誤解のおそれの無い限り、大抵の場合清濁は不問に附することとした。

さて「かづら」は蔓草（ツルクサ）の総称で、漢字は「蔓」とも「葛」とも書き、もと、蔓草やその他の植物の花や枝を髪に飾りとしたところから、髪飾りを一般に鬘（カヅラ）といったという³⁾。和名抄には髪に和名として「加都良」を充てている。これは今の仮髪に当り「鬘」は俗用字とせられて

1) 広辞苑。

2) 大言海参照。なお、慶長8年刊の「日葡辞書」には仮髪に当る分が *Cazzura* と濁っている。

3) 新言海。

いる。但し「都」字は和名抄では（ツ）にも（ヅ）にも使われたので発音の実体は明らかでない⁴⁾。

○——あやめ草花橘を玉にぬきかづらにせむと長月の——（万三・423）

○梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべくなりにつらずや（万五・817）

○梅の花咲きたる園の青柳をかづらにしつつ遊び暮さな（万五・825）

○霜枯れの冬の柳は見る人のかづらにすべくもえにけるかも（万十・1846）

○ほととぎすいとふ時なしあやめ草かづらにせむ日こゆ鳴きわたれ（万十・1955）

○——菖蒲草花橘に貫きまじへかづらにせよと包みてやらむ

（万十八・4101）

○ほととぎす今来鳴きそむあやめ草かづら⁵⁾ くまでに離るる日あらぬか
（万十九・4175）

○あしひきの山下日蔭かづらける上にや更に梅をしぬばむ（万十九・4278）
など、万葉時代は「ひかげのかづら」「あやめ草」「花橘」「青柳」などが、かづら（髪飾り）として用いられたようである。

ここで、われわれは「かづら」という語には植物であるところの「つる草」の意味と、今例示したような髪飾りの意味との二様あることを確認しておかねばならぬ。前者を≪自然のかづら≫と称するならば、後者は≪人為のかづら≫と称すべきだろう。諸書に見える自然のかづらの例としては「ひかげのかづら」「まさきのかづら」（一名ていかかづら）、「さねかづら」（別名びなんかづら）、「えびかづら」（葡萄の和名という⁶⁾）などがあり、人為のか

4) 和名抄での音仮名「都」字の用例は、湖（三都宇美）鼓（都々美）の如く清濁双方に用いられ、古事記で（ヅ）の音に使われた（豆）字を和名抄では佃（豆久太）妙美井（之三豆）八位（夜豆乃久良井）葛（加豆良）のように使って居り、何れも当時の清濁をば正しく判定することができない。

5) 四段活用動詞で、髪としてつける意。

6) 日本書記に「伊弉諾尊——黒髪（クロミカツラ）を投げたまふ。此れ即ち葡萄（エビ）となる。」と。古事記の同じ説話には、「蒲子」（エビカツラノミ）とあり、「えびかつら」を「かもじ」の一種なりともいう（源氏物語・初音の巻）。和名抄には「紫葛」（和名、衣比加豆良）、「蒲萄」（和名、衣比加豆良乃美）とあり。

づらとしては「山かづら」がそれに当るであろう。また別に「玉かづら」という語は単に「かづら」（即ち蔓草の総称）というに同じく、おもに和歌の枕詞などに使われているので、次の項に詳しく述べることにする。

玉 か づ ら

「玉かづら」の玉は美称で⁷⁾、それは単に「かづら」というに同じであるが、この語にもまた

△自然のかづらの意味に用いられる場合と

△髪飾り即ち人為のかづらの意に用いられる場合とがある。源氏物語の

「玉かづら」の巻の名は巻中の

○恋ひわたる身はそれなれど玉かづらいかなるすぢをたづね来つらむ
という歌によるといわれているが、ここでは「玉かづら」は「すぢ」を呼び出さんための序の詞として使われているから、自然のかづらの意を持つものである。また、謡曲「羽衣」の

○涙の露の玉かづらかざしの花もしほしほと……

では「玉かづら」は「かざしの花」とつづいているから髪飾りの意をこめた使いざまと察せられる。万葉集では次の例のように、使用法に三態あり、第一は

○山高み谷辺にはへる玉かづら絶ゆる時なく見むよしもがな（万十一・2775）

○谷せばみ峯辺にはへる玉かづらはへてしあらば年に来ずとも（万十二・3067）

○たに狭み峯にはひたる玉かづらたえむの心わがもはななくに（万十四・3507）

の如く「延へ」「絶ゆ」「絶え」という単語を呼び起すための序の詞として長々しく使われ、第二は

7) 新言海。

○玉かづら実ならぬ樹にはちはやぶる神ぞつくとふならぬ樹ごとに（万二・101）

○玉かづら花のみ咲きて成らざるは誰が恋ならめあは恋ひ思ふを（万二・102）

の如く、玉かづらのように「花のみ咲きて実ならず」というひとまとまりの意味をそのまま和歌の中心においた使い方と、第三に

○——いやつぎつぎに玉かづら絶ゆることなくありつつも——（万二・324）

○——玉かづらいや遠長く——（万三・443）

○——玉かづら絶ゆることなく万代に——（万六・920）

○玉かづら絶えぬものからさねらくは年の渡にただ一夜のみ（万十・2078）

○玉かづらさきく（《イ、たえず》）行かさね山菅の思ひ乱れて恋ひつつ待たむ（万十二・3204）

○人はよし思ひやむとも玉かづらかげに見えつつ忘れぬかも（万二・149）

○玉かづら懸けぬ時なく恋ふれども——（万十二・2994）

の如く、玉かづらが単に「絶ゆる」「絶え」「遠長く」「さき」「かけ」などの語の枕詞として使われているが、この際第三の「玉かづら」という語が仮りに省かれたとしても歌の味は別として歌の意味には何ら支障がないと見ることができる。第一・第二・第三とも「蔓草としてのかづら」の自然の形や性情が資料として用いられていて、髪飾りとしての玉かづらはあらわれていないことに注意したい。

なお右の例歌の中に見える「さき」は「まさきのかづら」「かげ」「かけ」は「日蔭のかづら」の略称で、結局「玉かづら」と同義なのであるが、ここでは「日蔭」の「かげ」と玉かづらの緑語「懸け」（髪飾りとして頭に掛けると）双方に利用したのであろうか。その点明らかでない。（なお、冠辞考・冠辞考続貂などに説がある）。

山 か づ ら

「かづら」から「玉かづら」へ移ったのは第一に三音節から五音節への転

化と考えられる。和歌の用語としては当然の傾向であろう。その「玉かづら」は「かづら」が美化され理想化せられたもので、和歌における常用語としての座を占め得たと共に、一種の古典語として定着してしまい、その活動範囲が限定せられ、当然のことながら、自然風な清新味を失いつつあったと見られる。

その座にとって代ったのが「山かづら」である。元来「山かづら」という語はこれ亦単なるつる草の総称で、玉かづら以前の「かづら」と全く同義なのであるが、玉かづらが古典化した結果、野性味を帯びた清新な感じの語として採用せられるに到ったと考えてはどうだろうか。従って専ら「山かづら」と呼ぶべき名称の草木は現実に無いわけで、「野生の蔓草」とか「自然のままの髪飾り」とかいう意味に用いられたことと思う。万葉集には「山かづら」という語を使った歌に次のようなのが見える。

○足引の山かづらの児今日ゆくとわれに告げせば帰りこましを（万十六・3789）

これは「かづら児」という名の少女が投身自殺したのを悼んだ歌で「足引の山」「山かづら」「かづらの児」という連鎖になっており、逆にいえば「かづら児」を修飾して「山かづらの児」とし、それに枕詞の「足引の」を冠したものである。単なる「かづら児」を「山かづらの児」と呼んだのは歌語としての音調の外に恐らくその清新味・純情味を賞でたのであろう。この次の番に位する歌は

○足引の玉かづらの児今日のごといづれの隈を見つつ来にけむ（万十六・3790）

とあり、当時「山かづら」と「玉かづら」とは語形を異にしながら義を同じうするほめ詞であつたろうことが察せられる。尤も此の「玉」を「山」の誤写と見る説が古来あり、いろいろ論ぜられているが、「代匠記」の説は成程と肯けるようである。詳しくは「万葉集大成」（巻四・258頁）に見える。この外に万葉集には

○あしひきの山かづらかげましはにも得がたきかげをおきや枯らさむ（万

十四・3573)

「山かづらかげ」は髪飾りとする「ひかげのかづら」のことで、美しき少女を喩えて「山かづらかげ」とも単に「かげ」ともいっている。こういういい方では今一つ

○斎串立て神酒すゑまつる神主部が((イ、かむぬしの))うずの山かげ((イ、玉かげ))見ればともしも(万十三・3229)

というのがあり、此の際の山かげも玉かげも「ひかげのかづら」を指したのだとせられている。このように二つの語が混雑することはそれらの過渡時代を示すものではあるまいか。

然し「山かづら」を正式に髪飾りの意として用いた和歌は、古今集・巻二十に見える採物歌が最も有名である。

○まきむく((イ、まきもく))のあなしの山の山人と人も見るがに山かづらせよ(大御歌所歌)

この歌の解は古くは色葉和難抄に⁸⁾

○山かづらとは神楽するに、まさきのかづらにて頭をゆふなり。それを山かづらとはいふなり。

袖中鈔に⁹⁾

○顕昭云、此歌は古今集、神あそびの歌中に、とりものの歌也。山かづらとは神楽するに、まさきのかづらにて頭をゆふを山かづらと云¹⁰⁾。

と見え、この二書は正しく同系統の解である。更に具体性を帯びたものとして夫木集¹¹⁾巻七に

○神まつるうつぎがきぬの白妙にゆふとりしでて山かづらせり

いうまでもなく、これは神楽する巫祝の姿を詠んだものと察せられるが、前の歌の「山人と人に見られるように山かづらせよ」は仲々味のある表現であ

8) 平安末かう鎌倉期にかけて生きた慈圓(後の慈鎮)の著と云われるが不詳。

9) 鎌倉時代の人、顕昭の著。

10) この山かづらについては橘守部の「神楽歌入文」に詳説あり、江家次第・冠辞考・古事記伝等を引いている。

11) 冷泉為相の門人藤原長清の編といわれる夫木和歌抄、三十六巻。

る。ここは山かづらをすることによって、穴師の山の山人（山賤の意か）と見られようというので此の場合の山かづらは「野の蔓草をもて髪飾りを施す」ことである。して見ると「山かづらする」またはただ「山かづら」といえばこれはすでに玉かづらのような装飾的な意味よりも、神楽によって象徴せられるような素樸と神秘とを表わすところにまで来ていると考えたい。

定 家 か づ ら

今までのような「山かづら」の追求をもう少々進めるつもりだが、それは室町時代を中心とする謡曲の上に此の語がどう投影せられているかである。謡曲はもともと古典的なものであり、かつ、和歌を生命とするといつてよい程の性格を持つものだから、古典語であり歌語であるところの「玉かづら」という語がしばしば用いられているのは当然だが「山かづら」の方はどうであらうか。

索引によれば、謡曲「葛城」「佐保山」「放生川」の三曲に「山かづら」という語がある。

○葛城山の岩はしよるなれど月雪の、さもいちしるき神体の、みぐるしきかほばせの、神すがたは恥かしや、よしや芳野の山かづら、かけて通へや岩はしの、高まの原もこれなれや。（葛城）

これは「山」が掛け詞、「山かづら」は「かけて」に冠した枕詞であろう。

○若草の山、水屋の御影、縁も恵も立ち立つ雲の羽袖を返すや 山 か づ ら
（佐保山）

この山かづらに対して佐成氏は「山の葛などを髪にかけること、舞人が飾りに用いるのである。」と註している。

○男山にし松たてる梢も草も吹く風の、みな実相のひびきにて、嶺の山かづら、其の外里かぐら、さんげの心夢さめ……（放生川）

この「山かづら」に対して田中允氏の註には「暁に山の端にかかる雲の意。神楽の採物の一つに葛のあるところから里神楽の縁語」と見える。但し、神楽歌には、「葛」の題はあるが歌詞は無い。この「暁の雲」の註解について

は次章に詳しく述べる。

ところで、右の「葛城」の詞章の中には

○女体のしんと思しくて、玉のかんざし玉かづらに、尚かけそへて蘿^{つた}かづらのはひまつはるる小忌衣。

という句があり、「玉かづら」「つたかづら」が場を同じうして用いられ、前者は美しいかんざしに、後者は身体中に這いまわった形であらわされているのは注目すべきところである。また、謡曲「定家」（古くは『定家かづら』といった）には

○シテ「なうなう是れなる石塔御らん候へ。ワキ「げにげに是れなるしるしを見れば、星霜ふりたるに蘿かづらはひまとひて形も見えわかず。是れはいかなる人のしるしにて候ぞ。シテ「是れは式子内親王の御墓にて候。蘿かづらをばていかづらと申し候。ワキ「あら面白や、ていかづらとはいかなる謂れにて候ぞ。シテ「式子内親王始めは賀茂の斎の宮にそなはりたまひ、程なくおり居させ候しに、定家卿忍び忍びの御契あさからず。其後式子内親王程なく空しく成り給ひしに、定家の執心かづらと成って、此御墓にはひまとひて互の苦しみ離れやらず。ともに邪姪妄執を、御経をよみ弔ひ給はば、猶々かたり参らせ候らはむ。（定家）

という一節がある。即ち此処の「つたかづら」は「ていかづら」と称せられる一種の蔓草で、物にはひまつわって苦しめるという意を寓している。そういう所から後年には「定家かづら」とさえいえば妄執のあらわれと見られ、また、執心・執念をば「ていかづら」で象徴することも行われるに到った。つまり「かづら」の中には此のような意を寓したものもあり「山かづら」との因縁も浅からず、後に再び採り上げる要があると思われるので、一応ここに書き留めるわけである。

暁 の 雲

謡曲と並んで中世文学の一特色をなす連歌の中で、「山かづら」がどう活躍しているかを知ろうと思い、連歌集の代表といわれる菟玖波集（二条良基

編、二十卷）を検したが「玉かづら」が一回使われているだけで「山かづら」は遂に発見できなかった。然るにそれから 140 年ほど後の奥書のある心敬の「私用抄¹²⁾」には

〇一、玉かづら、人の鬢にも匂によりて、

〇一、山かづらはあかつきの雲、また山人のかしらをからぐるも云。

とあって現代の辞典にも同系統の解がほの見える。（言海の如き）

然し、こうした解（暁の雲云々）は室町時代に始まったのではなく、遠く中古の末、中世の初め頃から行われ諸家の注目を浴びていたらしく、さきに挙げた色葉和難抄¹³⁾に

〇また、夜の明けがたに、横雲の山の嶺にたちわかるるを山かづらはなるといふ事あり。（日本歌学大系）

と見え、鎌倉期の袖中鈔（顕昭）にも

〇彼の山かづらする人は、夜の明くるほどに其のかづらをとりのくれば、山かづらはなると云ふはその時と云ふ也¹⁴⁾。暁山の端白むを山かづらはなると云ふは、其時をさす也。今云ふ、山の端にかかれる雲を山かづらと云ふは、かづらと云ふは、かづらに似たるが夜の明くる程に立ちのくが、かづらの離る様なれば云ふにこそ。山かづらする人の暁に取りのくる故とはいかが侍らん、たづぬべし。（日本歌学大系）

とあり、当時いろいろの説があった様子だが袖中鈔中の「今云ふ」という以下の説（恐らく顕昭の説）がいかにも穏当にきこえる。即ち山かづらに似た感じを以て山の端にかかった暁の雲が、夜の明けゆくにつれて立ちのぼって山肌を離れて行くのが丁度蔓草が引きはがされて山肌から離れるのに似ているから暁雲の立ちのぼるのを「山かづら、はなる」と比喩的に表現したのであるという。この場合の「山かづら」は朝雲のかかったのを山の髪飾りと見立てた着想が生命なのである。同じ鎌倉期の寂蓮の詠に

12) 古典文庫、「連歌論新集」による。

13) 注 8 参看。

14) 夜の明くるほどに其のかづらを取りのくると云うのは、神楽が夜行われることから来ている。

○まきむくの穴師の松原春くれば霞をかけて山かづらせり（夫木集）
これも春の山に霞がかかったのを、山かづら即ち山が髪飾りをしたと見立てたものであろう。順徳院の

○あらたまの年の明けゆく山かづら霞をかけて春は来にけり（続千載集）も同巧であろう。これらの歌の中の「かけて」は言うまでもなく「山かづら」の縁語に当る。また、以上の歌よりも年代の古い鎌倉初期に「暁時鳥」という題で定家の詠んだ

○時鳥いづる穴師の山かづら今や里人かけて待つらむ（新後撰集）
では、寂蓮に比して用語が同じ「穴師」「山かづら」「かけて」であるけれども、主題は雲でも霞でもなくて時鳥であり、山かづらは「かけて」を言わんがための縁語ないしかけ詞である。思うに、この時代前後から暁の雲の山肌を離るるという着想が生れつつあったのではないだろうか。

ここに到って「山かづら」という歌語は

《a》 蔓草の髪飾り

《b》 山の端にかかった朝雲

という二つの異なった意味に用いられるようになった。但し、**a**と**b**とは互に無縁のものではなく、**b**の場合も朝雲を山の髪飾りと見立てたのである。その上「かく」「かかる」という縁語が背後に控えていることをも失念してはならない。室町期以後のもろもろの作品の中にこの山かづらという語があらわれて来るとしたならば、それが**a**の意味か**b**の意味か、それとも **a・b** 以外の意味かを誤りなく判断して解釈せねばならぬ道理である。なおこの問題については幽遠随筆（入江昌喜著¹⁵⁾）という書に

○山かづらは暁の雲を云ふのみにもあらざるべし。祇翁説に、山の長々と続きたるをいふといへり。

と見え、後にも陳べるが種々な解のあることを理解しておかねばならない。

「暁の雲」（朝雲）そのものについても同様で

○春日野に朝るる雲のしくしくに、（綺語抄）

15) 日本随筆大成、第八卷。

○春日山朝立つ雲のゐぬ日なく、（和歌童蒙抄）

○朝にたちて夕にゐるといへり。但、朝ゐる雲ともいふ。（八雲御抄）
など、或は前掲の謡曲「放生川」やその他の中にも、雲と山かづらとの縁の深いのがある。例えば一度前に引いた次の句の如き

○かけてぞ祈る春日野の……縁も恵も立ち立つ雲の羽袖をかへすや山かづら。（佐保山）

さて、連歌の系統を引く俳諧に「山かづら」はどう詠まれているだろうか。「俳句大索引」で四句を拾い得た。

○淀舟や夏の今来る山かづら（鬼貫）

淀舟の上から眺めているのであろうか。もう目前に夏が来かかっている景で、この山かづらは恐らく山の端の白い雲であろう。

○明星や桜定めぬ山かづら（其角）

暁の明星の下の山の姿であろう。桜が一面に咲いているとは見えるが、それとも暁の白雲なのか明星の空でははっきりせぬ、という意か。山かづらは暁の雲をさすのであろう。

これは連歌諸体秘伝抄（伝宗祇）に「遠見の体」として挙げた「夜のほどに花さく山の朝霞思ふ色をばへだてざりけり」と同趣であろうか。

○山かづら家鴨の餌まで氷かな（奇淵）

春浅く、早い朝では何もかも氷っている。山の端の雲のみ白くふわりと、はや春の来ことを告げている。

○雲雪と咲くや桜の山かづら（不白）

春たけなわ、桜花が雲かそれとも雪かと見ゆるまでの満開。ここでは山の見事な髪飾りと雲の感じとを兼ねて意味していると考えられる。

地 唄 「雪」

ここで愈々序のところで問題とした地唄「雪」と対面することになる。まず、その全歌を掲げると

○雪（本調子）花も雪も払へば清き袂かな。ほんに昔のことならん（「イ、昔の昔の事よ」）。我待つ人も吾を待ちけん、鴛鴦の雄鳥に物思ひ羽の、凍る衾に鳴く音もさぞな（「イ、さぞや」）、さなきだに心も遠き夜半の鐘、聞くと淋しき一人寝の、枕に響く霰の音も、もしやといつそせきかねて、落つる涙の氷柱より、辛き命は惜しからねども、恋しき人は罪深く、思はぬことの悲しさに、捨てたうき、捨てた浮世の山かつら。

この唄についての解説は、吉川英史氏の「邦楽鑑賞入門」に教を仰ごう。

○（一）曲名。——曲名は「雪」となっているが、これは曲の内容をあらわすものではなく、単に歌詞の冒頭の「花も雪も払へば清き袂かな」の一節の中から「雪」をとって名づけたものと思われる。曲中では雪は降って居らず「枕にひびく霰の音も」という一節があるから、降っているのはむしろ霰であろう。

（二）作曲と作詞。

作曲者は——大阪の峰崎勾当、天明・寛政（1781～1800）頃の作である。

作詞者は——流石庵羽積。《三沢云、羽積は浪華の人、その編『歌系図』に天明元年（1781）の跋がある。》

（三）内 容。

唄の内容は、思う男に捨てられた芸者が浮世を捨てて尼となった心境をうたったもので、魂の凍りつくような、しんみりとした美しい曲である。——この曲は地唄の代表曲とされているのである。この曲はまた地唄舞の代表曲でもある。

もう一つ「芸能辞典」を覗いて見よう。

○——この雪は「時習考」に「南妓ソセキのことを作る」とあって、句の中にも「もしやといつそせきかねて」とその名を詠み込んであるが、当時思う男に捨てられて、遁世した実在の妓女があって、それを歌ったものらしい。寒夜の独り寝に、世を捨てた身ながら、昔つれなかった男のことを怨じ、男の罪業をかなしむ述懐の態に作られている。——歌詞にも

曲にも全体にしみじみとした感じの濃いものである。(加藤長治氏担当)
 とにかく、この名曲「雪」の末句に見える「山かづら」は何を意味するのか。「捨てた浮世の山かづら」とは意味深長に感ぜられるが、はっきりとした解釈は容易でない。

この歌詞に対して折口信夫博士は詳しい解を施している。非常に大切なものだが長文なので、失礼ながら途中を若干省略して援くことにする。且つ、今仮りに(イ・ロ・ハ)或は(a・b)等の符号を冠し、後に指摘する際の便宜に供する。

○(イ) 山かづらは歌の文学語としては何でもないが、連歌俳諧の方へ這入ってむつかしいものになってしまった。山の朝雲だとすると、山への段々だと言ふのことがある。だから山縵(かづら)とまじめに説くことは却ってわるい。世を捨てた身は山かづらを踏む一或は眺める一朝夕を暮して居る。さう言ふ身になって昔の事を思うてゐるのだ。煩惱を払ひ棄てて浄らかな生活に入ってる。

(ロ) その心から思へば、まるで昔の更に昔の様な気がする。別れた人は自分を何時又見ることが出来ようと待ち続けて居たろう。今もさうだろうか。(中略) そのつららのつらさにたえる命は惜しまぬが、思はれるは彼の人である。

(ハ) 恋しい彼の人には深い咎めを蒙って、

(ニ) 想ひもかけぬ憂き目を見てゐる。其を思へば死ぬるにも死なれぬ。

(ホ) ああ、その為に、此世の憂き生活を棄てた山住居ではないか。

佐々醒雪先生は『㉑辛い命はさて惜しくもないが、変らじと契った人が
 ㉒今更我を思はぬのは、㉓深い罪業ぞと、そのみが気にかかって、捨てた浮世になほ繫念が絶えぬ』と訳されたのは名訳である。殊に『罪深く』を世間風にくだいて読まれて居るのは感服するが、どうも、かうとって初めてよく通る様に思ふ。

(ヘ) 女が罪亡しに尼法師になったと見るが正しいであろう。(下略¹⁶⁾)。

16) 日本芸能史六講。

以上が折口博士の解のあらましであるが、問題となるのは

- (1) 恋しき人は罪深く
- (2) 思はぬことのかなしさに
- (3) 捨てた浮世の山かづら

の三点であろう。これに対する折口説と佐々説とを比較して見ると、

- (1) { (ㄱ) 恋しい彼の人は深い咎めを蒙って (折)
 (㉔) 深い罪業ぞとそれのみが気にかかって (佐)
- (2) { (ㄱ) 思ひもかけぬ憂目を見てゐる、それを思へば (折)
 (㉔) 今更我を思はぬのは (佐)
- (3) { (ㄱ) ああ、その為に此世の憂き生活を棄てた山住ひではないか (折)
 (㉔) 捨てた浮世になほ懸念が絶えぬ (佐)

となって両説にはかなりの距離が感ぜられる。その適否を考える前に、もう少し、考察の資料となりそうなものを挙げたい。その第一は地唄「山かづら」である。

地唄「山かづら」

これは宝永三年(1706)序のある「若緑」に見えるから「雪」よりもざっと八・九十年位は前のものである。編者は西鶴門人の北条団水(序には団酔とあり)。本文は少々長いが要するに廊の中の遊女が思う男の足遠くなったのを怨ずる常套句が多いので、参考になりそうな其の後半だけを引いて見る。

○——今はなかなか思はじものと、思ひ返せどまた恋しさに、乱れ乱るる
 枕の涙、月に背けて行く時鳥、いとど焦るる人はともなれば、せめて夢
 にと縑(かとり)の衣のよする間もなく声々告ぐる。鐘に消えゆく空とも
 なりて、野辺の干草の青きが上に、おもひ置きたる涙の露と、あこがれ
 出づる魂かと見ゆる、水の調べの乱れの糸に、同じ心が結ばれやすき、
 とかく玉の緒絶えなば絶えよ、峰もあらはな山かづら。

問題となるのは、やはり末句「峰もあらはな山かづら」である。現実の山かづらならば、時鳥の鳴く夏に葉枯れのするわけがないから「峰もあらは」な

のは葛の葉の枯れたためではなくて、峰にかかった朝雲が乱れ飛ぶ姿を心に描いての表現であろう。心ここにあらぬ捨てばちな胸のうちは、どうせ死ぬなら死ぬがよいと、峰にかかる朝の静かな雲が今や綾のように乱れ乱れて立ちわかれるのに似ている意であろうか。前の方に「鐘に消えゆく空ともなりて」という句のあるのも此の解を助ける。かくて峰の朝雲は現実の心境の象徴的な表現と見られる。

もう一つ問題となるのは「とかく玉の緒絶えなば絶えよ」で、「絶え」は例によって「山かづら」の縁語として使われたののだが、玉の緒の方は式子内親王の「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶことの弱りもぞする」を借りたのであろう。この式子内親王からは当然の経路として「定家かづら」の執念が連想される。そこで此の詞章の持つ心情には絶望的な胸の乱れと、思う人への強烈な執着とが共にこめられていると判断される。ここで自由な臆測が許されるならば、私には、平凡なこの詞章が或は名曲「雪」の先行粉本となったのではあるまいかとさえ思われるのである。

定家かづらの執念については松の葉補遺に収められた「七つ子」に

○ていかづらか離れ難やの。

又、長唄「狂乱雲井袖」¹⁷⁾に

○……思へばかかる執着の、定家葛の離れぬ仲を、隔てられてもそもやそも、思ひ出すとは忘るるからよ……

と用いられたのを始めとして、此の種の歌謡の中では、おのれの未練の苦悩を定家葛に寄せて唄った例が少なくない。

ところで、肝腎の「雪」の山かづらの方はどうであろうか。折口博士は、尼となって山寺に籠った昔の芸妓がいま目前に見える山かづら（つる草）を以て自己の遁世の義を象徴したと解された。（三のホ）「ああ、その為に、此世の憂き生活を棄てた山住ひではないか」云々と。この「山住ひ」は即ち山かづらで表現されている。

それが佐々説では「捨てた浮世になほ懸念が絶えぬ」というので、これは

17) 明和三年刊「新編江戸長唄集」。

山かづらの縁語「かかる」と定家かづらの「執着」とを併せ含ませた解であろう。ただ、解釈するに当たり、この「かかる」の主語的存在として単に蔓草としての山かづらを考えたか、それとも連歌俳諧での用法を承けた「山の端の曉雲」の意義で考えたかの差別は知ることができない。知り得るのは折口説との格段な解釈差のみである。元来、解釈には或る限度を超えるとその妥当性を客観的には断定し得ない境地がある。この場合もそれに近い視がないでもないが、前にあげた「峰もあらはな山かづら」を参照すると、この方の句は遊女が廊の中での心境を述べたもので、現実到目前に見える山中のつたかづらを採りあげたのでもなく、また、峰の曉雲を現実に見ての咏歎でもあるまい。恐らく伝統的な用法によって山の端の曉の雲をここに利用したのであろう。その用法を引き伸ばして「雪」にも用いたと解すればそれは佐々説により近いものとなるであろう。それに、「雪」という主題とその冒頭句「花も雪も払へば清き袂かな」に注目せねばならない。後者の意義は即ち、袂に散りかかる花や雪ならば、たとえそれが心なやまず風情であっても、手でうち払えば忽ち払いすてることができようが——といって、自分では昔のことなどきれいさっぱりと縁を切って清らかな雪のような心境になったつもりなのだが、ふとした切っ掛けから思出の糸をたぐりはじめると、思わず知らず胸がもえて来て「この思出ばかりは胸の底から捨て切れぬ」と結んだのであろう。これが雪を主題とした所以であると思う。

「雪」全体の解について次に問題となるのは

- (イ) 恋しき人は罪深く、
- (ニ) 思はぬことのかなしさに、

の二句である。即ち「罪深く」は恋しき人の説明か、それとも次の句に続いて副詞的に「罪深くて私の上を思わぬ」の義か、その解によって折口・佐々の両説、或は第三の説も生じて来よう。この際右近の「忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな（拾遺集）」を想起する必要がある。

また、右(イ)の部分については新編江戸長唄集に「雪」のメリヤスとして掲げた中に

○恋しき人に罪深く、捨てた浮世の山葛。

というのが見え、また、(二)の部分が新大成系のしらべに

○恋しき人はつみふかく、おもはんことのかなしさに――

とあるが、何れを正しとしてどう解すべきか、この小考の「山かづら」とは直接の関係がうすいと思うので、ここでは追及の手をやめて置く。

尻 取 り

「山かづら」という語が万葉の頃は植物のつる草の義であったのが、進んで中古では多く髪飾りの義に用いられ、更に中世に入るとそれと共に「山の端の暁の雲」の意にも用いられたことを順を逐うて考えて来たが、近世には暁雲の外に「執着」などの意義をも強く兼ねるようになったと認めざるを得ない。従って、この語を用いた歌謡にあってはその前後の表現をよく観察して適切な解を施す必要がある。

ところで、この小文の序に述べた通り、この語に着目したそもその初めは、江戸後期に流行した「尻取り」文句に使われていたことからである。その尻取りというのは

○牡丹に唐獅子竹に虎

虎をふまへて和唐内

内藤様は下り藤

富士見西行うしろ向き

むき身蛤ばかはしら

柱は二階と椽の下

下谷上野の山桂

桂文治¹⁸⁾は咄しかで

でんでん太鼓に笙の笛

18) 桂文治は落語界の旧家で、最も有名なのは六代目桂文治である（弘化三年～大正元年）。初代・二代・六代は大阪に住み、その他は江戸に住んだ。（芸能辞典）

ゑん魔は盆とお正月

(下略・綿谷雪，言語遊戯考による)

右の文中の山桂は或は山中の桂の木ととれなくもないが，そういう用例が見当らぬから恐らく山かづらの誤であろう。この「下谷上野の山かづら」は一体どういう意味であろうか⁹。句の構成は他の句どもに較べても可なり上品で，何かの成句をそのまま借りて来たのではないかを疑わせる。また，尻取りではないが当時の成句の中に

○橋場・今戸の朝烟り（行灯地口語呂合）

というのが見え，「下谷上野の山かづら」と対句とまでは行かなくとも，類句といった程度に見て差支えないように思う。

下谷は武蔵風土記や江戸砂子に「下谷の岡」と見え，上野の古名を「忍の岡」または「忍が岡」と云い，江戸期の初めに林道春が此地を賜わって桜を多く植えた所から，後世，花見の名所となったのだという。（凌雨漫筆・江戸砂子参照）従って上野と桜とは切り離せぬ縁で結ばれ

○都まさりの浅草・上野，花の春風音冴へる。（山家鳥虫歌）

○水風呂のあかなく思ふ花なれば上野の山に入りてこそ見れ。（嬉遊笑覧）

○花の上野は東の名所，詠めは同じ飛鳥山。（長唄，現在道成寺）

○八重の霞にいや高き，恵に何か上野山，花と恋とに憎まれて，（松の葉，第二巻）

○上野の山の花盛り，橋場の烟衰れにも，詞にみのる玉葛。（松の落葉，としま八景）

など，挙げるに違のない程だが，また

○花の盛りは三吉野の吉野より猶上野山，上れば下る車坂，彼方此方と見渡せば，群集の貴賤とりどりに，伊達を下谷の町とかや。（松の葉・狂女）
のように下谷と上野とは隣接しており，「武江略図¹⁹⁾」には「下谷町」「上野町」が仲良く並んで記されている。

こうした下谷・上野につづく「山かづら」は髪飾りや執念の義ではなくて，

19) 文政七年，岩崎常正の著。上野益三博士解説つき複製本による。

どこにも見られる「朝雲」であろうことは殆ど異議のないところであろう。尤も山の端の暁雲そのものは、もとをただせば山の髪飾りにもとづくものであることはいうまでもないが。

下谷の岡・上野の山に朝霞が恰も錦絵の引霞のように長々とかかっている景をほめたのであろうと解釈せられる。これを朝雲でなく実際の花盛りと見ることも、山の髪飾りという意味で可能であるが、下谷・上野と両者をくくった表現は桜よりもやはり雲の姿と見たいと思う。これに対する対句を求めるとすれば、「橋場・今戸の夕烟り」などが適切であろうが、生憎、文献の上には

○橋場・今戸の朝烟り

というのが見える切りである。

ここで結論に似たことをいえば地唄「雪」の「山かづら」は多分に「定家かづら」の執念から引いて、おのが「未練」「気がかり」を意味し、尻取りでは単純に朝雲・朝霞を意味したものと判ぜられるのである。

最後に付け加えて、もう一度大胆な臆測を述べて見たいと思う。ひそかに按ずるに「下谷上野の山かづら」は、若しかしたら、名曲「雪」の末句「捨てた浮世の山かづら」の『地口』ではあるまいか。近世末期の地口の中には次の例のように一句全部を地口化したものと、その半ばにとどまるものがあるもので、こんな臆推も心に浮かぶのである。

- ① 雪見に出たか山谷ぶね（一富士二鷹三茄子）
- ② 仲々器用独り感心（長々し夜を独りかもねん）
- ③ 屏風の絵から水が漏る（上手の手から水が漏る）
- ④ 紫蘇のうまさも七十五日（人の噂も七十五日）

然しながら、これは飽くまでもふとした思いつきに過ぎないので、むしろ問題はこうした思いつきを出発点として更に考察の歩を進めて行くべきものである。切に大方の垂教を仰ぎたい。

なお、本稿作成に際し大阪学芸大学の前田勇教授、本学の中埜教授のご助力を得たことを記して謝意を表する。

(9, 22, 1967)